後日談。というか、今回のオチ。という名の忘備録。

本展における「報告２：Memories ON SALE #3：南米パタゴニアでひとりで山登り中土砂崩れに巻き込まれて滑落、怪我を負い遭難し死にそうになりながら一週間生き延びた記憶」が初めて発表されたのは、2019年に参加したとあるグループ展だった。人々は面白がるような反応を見せつつも本気で購入を検討することはなかった。
そりゃそうだろうと納得した。
無名の作家から形のないものをそれなりの価格で購入するなんて冗談のような話だと自分でも思った。

経済的な応援の意味でやんわりと購入を申し出られたこともあったが、私はその人が本実験の趣旨を正確に理解しているかどうかを冷静に判断する必要があり、その結果やんわりとお断りをした。
このまま私の望む購入者は現れないのだろうと考えるようになり、販売中の体を保ちつつ死ぬまで誰にも打ち明けない秘密を持ち続けることに新しいやりがいを感じ始めてもいた。
今回とて本気の販売意欲があったわけではなく、ただ、私には沈黙で守っている大切な記憶があるということを匂わせることが展覧会の要素として必要だった。

最終日に遠方からわざわざ展示を見に行ってくれた人がいた。私がとても信用して慕っている人だった。
その人は、すでに私の個人的なことをいくつか知っていて私はその人に親密な相談をしたこともあった。
展示会場にいるその人から記憶の購入希望の旨が記されたメールを受け取り、私はまず驚き、喜び、そして恐ろしくなった。いざ売れたとなると、それを受け渡し可能な形にできるのか、つまり一度も話したことのない７年以上前の記憶で上手に物語をつくれるか、そもそも正確に覚えているのか自信がなかった。

その不安はさらに深刻な心配を生んだ。
あの出来事は、本当に、私の身に、起こったのか・・・？
私はその出来事をひとりぼっちで経験したので、それを共有する他人はいない。その期間に起きたさまざまな出来事を物語化することなく、混沌の、無秩序のままに保管してきた。
時系列に沿って整列せず、因果の整合性を図らず、起承転結もオチもつけず、無防備に外部の物語の影響にさらしながら脳のメモリに浮ばせておいたので、「私の」経験としての輪郭線は曖昧だった。
自問自答の日々は続いた。私は妄想を事実だと思いこんでいるんじゃないだろうか。
だとするとやばい。
記憶が物語によって外部化されず経験主の内に留まり、誰とも共有されないことの弱さを思い知った。
その記憶の担保となる、とある思い出の品があって（それは額装され私の部屋の壁を飾っている）それだけが私の頭がおかしくなったのではないと信じられる心の拠り所だった。

受け渡し前の準備運動として、覚えていること全てを時系列順にノートに書き連ねていった。この作業にはとても長い時間がかかった。
Google Mapや当時のメールを読み返し、強烈な記憶の間の空白を埋め、詳細を掘り起こしていると実感が湧いてきて安心した。
けれど、真実味が増すごとに心身に支障をきたした。
心拍が乱れ顔が火照り、ぬめりとした汗が滲んだり涙が出たり嘔吐したり身体が痒くなったり痛くなったりした。
情緒不安定になり悪夢に苦しんだ。
一通り思い出して書き起こした後はその記憶について触れないように努めた。

記憶譲渡の当日、私は緊張しつつも躁状態だった。
受け渡し場所のホテルに早めに着き、トイレで自分の顔を見ると黒目が開いてギラギラしていて不気味だった。

一度きりの大事な機会なので、事前に自分自身への注意事項を設定した。
・噺家として振る舞わず、購入者を私の話の観客にしないこと
・記憶引き渡しの会合をカタルシスのために利用しないこと
・購入者との良い人間関係のためにコミュ力を発動させず、エネルギーを記憶の伝達に全集中させること
・物語の出来栄えを良くするために事実を盛ったり歪めたりという過剰な編集を行わないこと
・自分の主観をできるだけ排除して事実（だと少なくとも私自信が信じていること）を語ること

その結果、わかりやすい盛り上がりもオチもない不親切な語りになったが問題はないと考えている。
私は本当だと思っていることを列挙し、購入者はエンタメ的な期待をなしに話を聞いてくれた。
語りの後、私たちは記憶の所有権移行に関する契約書を交わし、代金が支払われた。
会合は２時間半に及んだ。
夕食をとるためにその人とホテルから出ると、心が軽くなり足のむくみも取れたような気がした。

それから一ヶ月以上がたった今、その記憶とはよい距離ができた。
寝ている時や起きている時、いくつかの場面が浮かんできてもそれはもう「私の」記憶ではなく、いつか摂取した映画や小説、他人の思い出話のように感じる。
今ならあの出来事についてもっと上手に語れる気がする。その権利がないのでできないけど。
混沌の記憶も一度型を与えられると必要に応じていつでも整列して物語を再生産、自動生成できる。とても便利。
そのことを私は危うんでいたはずだった。
生の記憶そのものは不安定で実在が危うい、経験主だけでは守りきれない。
だから大事な記憶は、形を失ってしまわないために、物語という容れ物によって身体を与えられ、複数の主体に寄生してきたのだろう。
共同管理者を増やしながら、語り手や記憶主の特性（生きている場所や時代、文化背景、その時の気分や体調など）によって無限のバージョンを生んできたのだろう。
記憶は物語によって支えられているのかもしれない。

私は展覧会のタイトルに「物語によって記憶が貶められないために」というフレーズを入れたけど、物語が記憶を支配しているわけではなく、そのふたつは共依存関係にあるのかもしれない。
今改めて展覧会のために書いた声明を読むと、あんなにも自己物語化及び他人との共有について警戒しなくてもよかったのでは？と笑ってしまうけど、あれはあれで非常に真っ当だとも感じるので、物語システムとのいい関係を目指していこうと思います。

2024年8月21日
南ベルギーの街Maldredの修道院にて

※フランス語があまり話せないくせにフランス語しか話されていないこの修道院に一週間ただ居据わったことでこれまで言語化の機会がなかった名付け以前の感覚を見つめ直すいい機会になりました。
他人と言葉で上手にコミュニケーションできない状況では自分自身との言葉の応酬が始まる、というのは、これまでの経験を振り返っても起こりがちのような気がします。

※ここでは、１日に１度のミサ、４度のお祈りの時間があり、私もできるだけ参加しました。
語られ歌われている内容を理解しないままに立ち上がったり着席したり両手を胸の前で組んだりしながら時間を過ごしました。
そこで展開されている何かしらの大きな物語を受け取れないままそこに同席する。
昔、グアテマラのジャングルでシャーマンのプライベート儀式を受けた時、意味もわからず蝋燭を燃やしたり花を散らしたりと勤しんだ記憶蘇る。

※ミサにおける神父はストーリーテラーの役割を担っているのだと思いました。
「アーメン」というオチに向かって、声の強弱や間の取り方、聖杯やご聖体代わりのお煎餅を右へ左へとやる仕草により物語の効力を最大化することが神父の腕の見せ所なのかもしれない、聖書の小噺に明るくなく、どの場面について語られているか見当もつかない私の脳内にも何かしらの情景が浮かび上がりましたが、そこに生じたミスコミュニケーションは否めないでしょう。

※とはいえ、大きなメッセージ「神を崇め善き人間であれ」は受け取ったような気がします。
それは言語による情報伝達だけではなく、石の教会内に響く聖歌、ステンドガラス越しに入る柔らかい光に照らされて艶やかな神父の黒い肌、腰の著しく曲がった魔法使いのような高齢のシスターが切実に祈る姿などから。
フランス語を理解しない私はこのストーリーショーの部外者かもと考えたりもしたのですが、ショーの舞台装置そのものからもしっかりと影響を受けまんまと毒を抜かれて家路につきます。